

平成23年度 第4回川崎市教育改革推進協議会（摘録）

日 時 : 平成24年3月26日（水）18:00～20:00

場 所 : 第4庁舎4階 第6会議室

出席者 : 小松委員、高木委員、大下委員、松田委員、山田委員、松本委員、
菊池委員代理：新城小学校 川崎校長

（事務局）金井教育長、平野総務部長、鈴木教育改革推進担当部長、丹野教育環境整備推進室担当課長、高梨職員部長、渡邊学校教育部長、野本生涯学習部長、阿部教育改革推進担当課長、上杉指導課担当課長、池谷生涯学習推進課長、広瀬企画課長 ほか

欠席者 : 田中委員、小原委員、門倉委員、垣地委員

傍聴者 : なし

司 会 : 広瀬企画課長

[配布資料]

- ・教育委員会の防災対策について
- ・参考資料1「新学校防災マニュアル作成指針」
- ・参考資料2「学校防災実用ガイド」
- ・学校施設の有効活用の推進について
- ・平成24年度教育施策の主な取組について
- ・参考資料3「一人ひとりの子どもを大切に作る学校をめざして」
- ・第3回教育改革推進協議会資料の差替え
- ・平成23年度第3回川崎市教育改革推進協議会の摘録
- ・川崎市教育改革推進協議会設置及び運営要綱
- ・川崎市教育改革推進協議会委員名簿

1. 開会

2. 教育長あいさつ

3. (報告・説明)

教育委員会の防災対策について（第2回協議題）※企画課長説明

(委員)

- ・ 学校を指定して研究するとのことだが、何校程度か。また、どんな研究内容なのか。

(事務局)

- ・ 各区2校程度を検討している。実際の内容については、学校と相談させてもらいながら取り組んでいく。
- ・ 防災備蓄については保存場所などもあるので、学校と相談する。
- ・ 教育委員会が決めたことを学校現場が受け入れられるかは、学校現場の状況による。
- ・ 備蓄物資については今後も検討していく必要があるが、LED ランタンは今年度予算で対応することになった。

(委員)

- ・ 学校によって状況・条件が全然違う。学校現場と地域・保護者が連携して色々決めていったほうがいい。教育委員会でガチガチに決めてしまうとあまり役に立たないだろう。自分の学校ではどうだろうという視点で考えてもらうことが必要だ。
- ・ 研究指定校での研究を他校へしっかり波及してほしい。
- ・ 最近では防災だけでなく、減災という言葉も出てきたが、そういう考え方も入れられたらと思うがいかがか？

(事務局)

- ・ 校舎の耐震化は終わったが、非構造部材である照明器具などの落下などがある。補助メニューも創設されているが、今後は非構造部材についての耐震化を進めていく。その結果、被害を少なくしていきたい。
- ・ 状況調査を進めているが、どの部分を最初に耐震化するのかを調査しているところである。国の補助金を活用しながら取り組んでいく。

(委員)

- ・ 川崎市は先進的に取り組んでいるとは思いますが、できるだけ早く対応してもらいたい。

4. 学校施設の有効活用の推進について（第3回協議題）※企画課長説明

(委員)

- ・ 有効活用の受益者負担の中で開放運営委員会はどういう役割か？

(事務局)

- ・ 各学校に設置している委員会である。PTA、青少年団体、指導員、体育指導員、地域住民代表+学校の教員に入ってもらっている。校長は顧問の役割を担っている。

(委員)

- ・ 一つの学校を30団体以上が使っている。
- ・ 卒業式の関係で、利用休止期間があった。
- ・ 不満があった場合の対応なども調整してもらっている。
- ・ 特別活動室は多く利用されている。

(事務局)

- ・ 現在、市長からのオーダーで、一時的余裕教室を活用して、普通教室の開放を検討している。特別教室の利用拡大に向けた広報を行っていきたい。
- ・ 施設開放のためだけでなく、子どもたちにとってもよくなるように施設を整備していく。

(委員)

- ・ 防災と有効活用は関係があると思う。
- ・ 個人情報の問題や開放できる条件などもあるだろうが、子ども中心であることは外せないと思う。

(委員)

- ・あまり活用されていないとのことだが、こども文化センターでも利用日が重なっていると聞く。しっかり広報していけば使われるのではないか。

(委員)

- ・グラウンドや体育館は使用者がカギの管理なども行っていたが、今まではクローズされた状況だった普通教室の開放にかかる管理は難しいと思う。どういう人を地域から集めていくかが重要だろう。

(協議題)

5. 平成24年度教育施策の主な取組について ※企画課長

(委員)

- ・いじめは発見するのが難しい。担任が知りながら、周りに相談しないことが多い。しかし、学校ばかりが目立つが、家庭にも問題がある場合もある。言い訳のケースが多いらしい。原因は色々あると思うが、家庭との連携を含め、川崎市はどういった根本的な原因に対しての対策を考えているのか？

(事務局)

- ・先生の目の前でいじめを行うことはない。みつけにくい。からかいの中で伝わらないこともある。最近はいじめの他に「いじる」といった事象がある。「いじる」と「いじめ」の見極めが難しい。
- ・ある程度疑われる場合は、複数の目で見ていくことが必要。
- ・経験のある教員にはわかるのかもしれないが、経験の浅い教員には自分の責任と抱え込んでしまわないように相談できる環境が必要となる。全体で考えていくことが大事である。
- ・中学校の思春期のケースもある。教員でなくとも、誰かに打ち明けられる状況が大切。
- ・学校の状況が家庭で理解されない場合もある。状況を丁寧に伝えていかななくてはならない。
- ・状況を家庭にしっかり伝えて、学校と家庭の連携を図ることが必要だと考えている。

(委員)

- ・教員が声をかけてくれたことで救われることもある。日頃の声かけや家庭との連絡など、基本的なことができているのか？

(事務局)

- ・教員は丁寧に声をかけている。子どもたちの状況を教員が知る術を持ち、いじめが起こらないようにすることが大切である。芽の小さいうちから摘み取れるように知っていくことが必要となる。そのためにアンケートなども行っている。

(委員)

- ・アンケートでは駄目だと思う。

(事務局)

- ・アンケートも生徒の状況を知る一つの判断材料になると考えている。

(委員)

- ・川崎市独自で行っている「共生＊共育プログラム」の導入時はよくおたよりなどをもらっていたが、途中の状況がわからない。子どもが持って帰ってきてても要領を得ない場合もある。保護者と学校との連携が大事だと思うので、学校から情報発信して、情報の共有化を図ってもらいたい。

(委員)

- ・学校現場では人が人を教えていくので、丁寧に子どもを見ていきたいと考えている。教育委員会が現場をきちんと支援してくれているのがよくわかる。体制を構築してくれているが、学校と親、担任と親などの問題はなくなるものではない。教員の資質を上げなくてはならない。支援チームで継続的に親と話をし、子どもが通えるように対応しているところだが、そもそも「いじめ」は無くなることはない。
- ・「共生＊共育プログラム」を導入し、学校現場でも期待しているところだが、保護者へのアピールが足りていない。学校の努力が必要だと考える。Q-Uの結果の返し方やクラスづくりが研究テーマとなっているので、実践の積み重ねがないと難しいところもある。指導主事がそれに基づいて助言などの支援をくれている。また、アンケート結果をどう保護者へ伝えていくかが課題となっているが、その結果が見える化されるとクラスの状況・傾向が掴みやすいと思う。

(事務局)

- ・「共生＊共育プログラム」の補足として、リーフレットを毎年改定し配っている。また、モデル校として小学校9校、中学校9校で研究を行っている。各モデル校にてプログラム担当を設置し、担当者にアンケートの結果をどう読み取って、どういう学習活動につなげればいいのかを学ぶ研修も行っている。
- ・12月には各区のPTA連絡協議会でもプログラムのことを取り上げてもらっている。保護者対象にプログラムを体験してもらった。まだまだ保護者への周知が足りない部分はあるが、根気強く伝わるようにしていきたい。
- ・それと、子どもたちの状況に気付くことも大切である。リーフレットを配っても気づかなければ意味がない。教員が授業の中などでも子どもの様子に気付くことも授業力向上の一つだと考えており、授業力向上推進事業をいう施策も行っているところである。

(委員)

- ・いじめの問題が顕在化するのには学校になりがちだが、すべての原因が学校にあるわけではない。家庭や地域による影響もある。悩みや課題を抱えている家庭が多い。様々な家庭の状況が学校で出てしまう。未然防止であれば、家庭で何ができるのか、地域でどう支えていくのかを考えていかなければならない。地域力を高めることが必要である。家庭と地域がタイアップして取り組んでいくことによって、子育て支援をしていかなければならない。地域にも責任があるので、社会教育と地域教育の視点も取り入れてほしい。

(委員)

- ・ 総合的という点で、すべてがつながっていると思う。

(委員)

- ・ 特別支援の社会自立促進については大事だと考えるが、受け入れてくれる企業がどれだけあるのか。企業としても成果があがっているかが重要。受け入れてくれる企業の開拓がされていくのかが知りたい。

(事務局)

- ・ ろう学校の中に分教室を設置し、そこでは就業支援に力を入れている。教員は必死に指導しているが、まだ始まったばかりである。先を見通した仕組みづくりが大事だと考える。
- ・ 今までは企業への理解をもらうのに工夫に教員がお願いに回っていたが、コンサルタントに企業との調整をしてもらえたことによって、多数の企業を開拓することができ、効果をあげている。
- ・ 力を発揮できる環境を作ってもらえれば、働ける人は多い。

(委員)

- ・ 中高一貫校については？

(委員)

- ・ 最初の生徒が卒業する時まで色々大変だと思うが、昔からの川崎高校を知っているので、中高一貫教育校には大きな期待をよせている。

(委員)

- ・ 都内の中高一貫校のコンセプトに関わったが、小学校から見て、中高一貫の存在はどうか。中学の入試選抜などどうか。

(委員)

- ・ 西中原中学校区だが、子どもが学校に合っているかを保護者や小学校側はよく考える。

(委員)

- ・ コンセプトが重要だと思う。あまり欲張ってもいけないし。受験エリート校は作らないよう、文科省から言われていると思うが、6年間もしっかりやれば、学力はつくはず。

(事務局)

- ・ 中高一貫教育での教育を周囲に広められるようにしていきたいと思っている。川崎らしさを前面に出し、それに同意してくれた子どもを受け入れることが大切である。優秀な子が集まるかもしれないが、漢字がとか文章がとかではなく、「適性をみる」ことが必要である。また、体験したことを書く検査にすることもある。一方で抽選という意見もある。
- ・ 千葉の方での体験学習なども検討中で、カリキュラムも体験から学べることを入れる予定である。e-Learningの導入も考えている。コンセプトは「生きる力」であって、自分で考えていける生徒を育てていきたい。

(委員)

- ・ 中高一貫教育校にはとても期待している。川崎市でやってくれていることが嬉しい。課題解決能力はこれからの時代に、身につけることがとても重要である。特にプレゼン能力と人間関係能力は今後、国際社会を生き抜いていくのにも必要になっている。そこに力をかけてほしい。自分を語れない日本の若者が多い。若いうちから、自分を語れることができる人を育てて欲しい。また、課題発見能力も加えて欲しい。与えてもらって解決するのではなく、自分で見つけていく力を身につけさせて欲しい。

(委員)

- ・ 高校教員の意識改革が必要ということに尽きる。授業力をどのようにつけるか。知識伝達ではない方法を教員が習得できるかが重要である。不登校にも言えることだが、授業改善をすれば、問題の解決が図れる。わかる人しか相手にしない学校では不登校が生まれる。いじめはわからないが、不登校はなくせる。県立高校の入試問題も改善してきている。12月に出た、来年度の入試問題の改善ポイントをまとめたものが出ているので、見てもらいたい。普段の授業の改革をしなければならない。生徒が中高一貫教育校に入って、つぶれないように期待している。

(委員)

- ・ 資料3で地域の教育力という話が出ているが、学校教育ばかりで、社会教育施策が見えない。教育プランで明確に表現して欲しい。

(事務局)

- ・ 社会教育というより、地域教育が必要だと思っている。持っている地域の力を循環させていくことが必要だ。市の施策として、仕組みづくりが必要だ。
- ・ 学校の中だけで解決できないことでも、生涯学習で解決できることは多分にある。子どもたちが外の社会に目を向けられるような地域を創りたい。

(委員)

- ・ 教育プランのサブタイトルにも「市民の力が教育を変える」とある。

(事務局)

- ・ 夏休み期間の職場体験の際に地域の方が学校に詰めてもらっていて、いいことも悪かったことも地域の方が聞いてくれていた。子どもの話を聞いてくれる機会を設けるだけで、子どもは救われたと思う。そういうつながりが地域の中でできたらいいと思う。

(委員)

- ・ 委員のみなさんから一言ずついただきたい。

(委員)

- ・ 多角的な視点で川崎市の教育の勉強になった。子どもたちが地域に育ててもらったことを最後に地域に返せるようにできたらいいと思う。

(委員)

- ・ 若者のコミュニケーション能力が低下している。内々にこもる人が多くなってきた。人と環境と、人と地域など、接点が多い教育をして欲しい。対話をする授業、体験などの接点をもつことを川崎でやってほしい。

(委員)

- ・ 施策としてかわさき教育プランはいいものだと思っている。教員の自信と誇りをもって教育活動ができるように環境を整えて欲しい。

(委員)

- ・ 懐の深い地域を作って、みんなで温かい地域の中で子育てを行ってもらえるようにしたいと思っている。学校も「手に負えない子」は家庭や地域で育ててこいと本音で言いたいところもあるのではないかと。根っここのところを家庭と地域が責任をもってやっていくように、そういった土壌を作って欲しい。

(委員)

- ・ 子どもは環境に応じて育っていくと思っている。影響を与える大人たちをどうするか。ふがいない大人が多いのではないかと。親になる世代などのふがいなさを感じる。地域教育会議の対象は大人だと思っている。大人に考え方や活動・行動などが間違っていることに気付いてほしい。気付きの場を提供しているつもりだが、教育委員会が仕組みづくりをやって欲しい。

(委員)

- ・ 学校現場は地域の中の学校という認識を強く持っている。現場は年度末で疲弊しているが、地域に支えられて頑張っている。川崎市は教育予算が財政難の中でプラスになっており現場としては心強い。この体制を継続して欲しい。

(委員)

- ・ 今は川崎市に住んでいるが、とてもいい街だという実感ある。子育てをする上でも魅力的な街だと思う。しかし、PRが下手だと思う。いい人材が川崎で働こうと思ってもらえるようにPRも頑張ってもらいたい。大都市であるから、市民全体の力を上げることは難しいだろうが、細かい点に配慮しながら市民のために尽力してもらいたい。

(事務連絡後閉会)